原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第15集

原の辻遺跡

幡鉾川流域総合整備計画(県営圃場整備事業)に伴う緊急発掘調査報告書Ⅷ

1999

長崎県教育委員会
長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所

原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第15集

原の辻遺跡

はる　つじ

幡鉾川流域総合整備計画（県営圃場整備事業）
に伴う緊急発掘調査報告書Ⅷ

発刊にあたって

本書は，幡鉾川流域総合整備計画の県営圃場整備事業に伴って，平成10年度に実施した原の辻遺跡の緊急発掘調査報告書です。

発掘調査の結果，弥生後期の濠１条，前期の溝１条，前期末から中期初頭の溝１条，古墳時代初頭の溝１条，弥生中期の掘立柱建物５棟，旧河道，多数の土壙と小穴等が確認されました。出土遺物は，弥生時代の土器，石器，建築部材，鉄器，古墳時代の土師器等があります。今回，掘立柱建物が確認されたことにより，低地での居住区の存在が明かになりました。旧河道を埋め立て，水田として利用された可能性も考えられます。

原の辻遺跡は，『魏志倭人伝』に現れる国々のうち，中心集落が特定できる希有の事例として，重要遺跡として平成９年９月２日に国の史跡指定を受けました。現在，遺跡保存整備委員会において，その保存と活用を図る検討がなされていますが，地域の方々のご理解とご協力をいただきながら，調整を図っていくことも大切であると考えます。

島内には，原の辻遺跡のほかにも，カラカミ遺跡，車出遺跡，双六古墳，笹塚古墳といった多くの文化財があります。これらは，永く培われてきた貴重な文化遺産であり，この遺産を後世に引き継ぐことが私たちの責務と考えます。

本書が，学術研究及び文化財保護の面で活用されることを念願して刊行のあいさつといたします。

平成11年３月31日

長崎県教育委員会教育長　　出　口　啓二郎

例　　言

1．本書は，幡鉾川流域総合整備計画に係る県営圃場整備事業の農道建設工事に伴って実施した，平成10年度の芦辺町深江鶴亀触所在の原の辻遺跡の緊急発掘調査報告書である。

2．本書の執筆は，1と2(1)(2)を西　信男，2(2)(3)と4を村川逸朗が，それぞれ分担して行った。

3．本調査は，全体の950㎡を農林側費用負担として県教育委員会が平成10年10月15日～平成10年2月26日まで行い，170㎡は，芦辺町教育委員会が国庫補助を受けて平成10年10月20日～平成10年12月12までの日程で実施した。

4．調査組織

県関係

調査主体	県教育庁原の辻遺跡調査事務所	所長	田川　肇
調査担当	同	文化財保護主事	村川　逸朗
	同	同	西　信男

町関係

調査主体	芦辺庁教育委員会	教育長	川原　忠雄
調査担当	同	文化財指導員	松永　泰彦
	同	同	山口　優

5．本書には，県教育委員会が主体になった部分と芦辺町教育委員会が主体となった部分を併せて掲載した。

6．本書に関する出土遺物と図版及び写真類は，原の辻遺跡調査事務所及び芦辺町教育委員会に保管している。遺物は，原の辻遺跡調査事務所及び壱岐・原の辻展示館において展示保管する。

7．本書の編集は，西が行った。

8．本書では，磁北を方位として使用した。

本 文 目 次

例言

1　地理的歴史的環境……1
(1)　地理的環境……1
(2)　歴史的環境……1

2　調　　査……3
(1)　調査概要……3
(2)　遺　　構……6
(3)　遺　　物……25

3　ま　と　め……30

1．地理的・歴史的環境

(1) 地理的環境

壱岐は，九州本土と朝鮮半島の間に位置し，壱岐・対馬間約48km，壱岐・松浦半島間約20km，壱岐・福岡県糸島半島間約33kmと，古来より大陸文化の中継地点として重要な役割を果たしてきた。反面，刀伊の来襲や元寇によって被害を受けたり，また，防人を設置したりするなど常に外敵の襲来におびえ続けてきた。壱岐島は，東西約14.8km，南北約17.2km，面積約138.12kmの本島と26余りの付属島から成り立っている。行政的には現在4町に分かれており，人口3万5千人を数える。島の基盤は第3紀層で，全体的になだらかな玄武岩台地で，最高峰の岳の辻でも213mにすぎない。島の南東部に「深江田原」(約200ha) と呼ばれる平野があり，長崎県下では，最大の沖積地として，また，後世の干拓による県央部の諫早平野を除けば，県下最大の穀倉地帯として有名である。この深江田原を東に向かって流れ，内海に注いでいるのが，延長9kmの幡鉾川である。また，幡鉾川の支流の池田川が，深江田原を南から北へ流れている。遺跡は幡鉾川の南側一帯に広がっていて，今回の調査地点は，幡鉾川の南側，台地部(南から川に直交する形で突出した南北1000m，東西250m，標高の18m前後の舌状台地，台地中央部が高く，北端部との差は約3.0m) の西側にあたる，農道部分である。

(2) 歴史的環境

壱岐は，歴史的には，「一支国」として3世紀の歴史書『魏志倭人伝』に登場してくる。その当時の一支国は「官をまた卑狗といい，副官を卑奴母離という。竹林・叢林が多く，三千ばかりの家がある。やや田地があり，田を耕してもなお食べるには足らず，また，南北に行き米を買うなどする。」状況であり，人々が活発な交易活動を行っていたことを物語っている。原の辻遺跡は大正時代から紹介されており，以来，東亜考古学会や九学会，長崎県教育委員会によって，調査が行われてきた。平成5年度の調査では，丘陵部を取り巻く多重環濠が確認されて注目を浴びた。また，平成6年度からの調査では，弥生時代の旧河道や土壙群，古代の道路状遺構が確認されている。原の辻遺跡は，壱岐島内の弥生時代の遺跡の中でもっとも規模が大きく，出土遺物の質・量ともに群を抜いているところから，現在，「魏志倭人伝に記された国の都が特定されている唯一の遺跡」である。古墳時代になると，遺跡は数多いけれども，弥生時代から連続するものではなく，壱岐最古の古墳と考えられているのは，5世紀に築かれた大塚山古墳である。6世紀から7世紀になると，古墳は集中的に造られるようになる。なかでも，県内最大規模（全長約93m）の前方後円墳である双六古墳，同じく県内最大規模（直径約45m）の円墳である鬼の窟古墳，金銅製馬具が出土した，直径約38mの笹塚古墳などが有名である。8世紀になり，律令体制の下，壱岐は，西海道のなかの一国としての地位を与えられた。『養老令』には，「壱岐・対馬・日向・薩摩・大隅等の国は，惣じて鎮桿，防守，及び蕃客の帰化を知る」と規定されており，「島司」の派遣と防人の配置がなされて，その任にあたっている。また，律令体制下において，壱岐は，下国として扱われている。さらに，『延喜式』によれば壱岐島には，優通・伊周の二駅があり，それぞれ五疋ずつの駅馬をおいている。両駅は，それぞれ壱岐島の北端と南端に位置しており，その最短距離のルートについて，津の宮から池田・興原に至る現在の道が想定されている。平成7年

には，幅約6.0mの８Ｃ末には廃絶したと思える道路状遺構が，原の辻遺跡川原畑地区の調査において検出されている。また，島には，壱岐島府が設置された。所在地については，印鑰社とも呼ばれる式内社の興神社がある芦辺町興触が，島府所在地と考えられている。一方，原の辻遺跡から，木簡が出土，遺跡南端部からは，９世紀を中心とした輸入陶磁器片も出土しており，したがって，初期島府は，原の辻遺跡と重複している可能性がある。（西）

〔参考文献〕
1．『原の辻遺跡』長崎県文化財報告書第26集　長崎県教育委員会　1976
2．『壱岐嶋分寺Ⅱ』芦辺町文化財報告書第７集　長崎県芦辺町教育委員会　1993
3．『壱岐嶋分寺Ⅲ』芦辺町文化財報告書第８集　長崎県芦辺町教育委員会　1994
4．『原の辻遺跡』芦辺町文化財報告書第９集　長崎県芦辺町教育委員会　1995
5．『椿遺跡』石田町文化財報告書第１集　長崎県石田町教育委員会　1996
6．木本雅康　「律令国家とその社会」『原始・古代の長崎県　通史編』　長崎県教育委員会　1998
7．横山　順　「壱岐の古代と考古学」海と列島文化　第３巻　『玄界灘の島々』　小学館　1990

第１図　遺跡の位置（１／240,000）

2　調　　査

(1)　調査概要（第１～４図，図版１）

今回の調査は，県営幡鉾川流域総合整備計画（平成４年度～平成13年度）区域内の農道造成に先立って行われた緊急発掘調査であり，関係各機関との協議を行って，農道造成区域の1,120m²について調査を行った。そのうち，原の辻遺跡調査事務所が950.4m²，芦辺町教育委員会が169.6m²を担当した。調査対象地区は，原の辻遺跡調査事務所の敷地南東隅より南に向かって一直線にのびる。調査区は，延長200mであるが，北から120mは，幅5.8m，残りの80mについては，幅5.3mのトレンチを設定している。20m毎に大グリッドを設定し，Ⅰ～Ⅹ区とした。大グリッドは，その中を５m毎にA～Dの４区に細分した。

①調査区別遺構検出状況，遺物出土状況

Ⅰ区は，弥生時代中期の掘立柱建物の柱穴や，多数の小穴を，検出した。

Ⅱ区は，弥生時代中期の掘立柱建物が２棟，弥生時代後期の濠が一条，多数の土壙・小穴を検出した。弥生時代中期から古墳時代の遺物が出土している。

Ⅲ区は，弥生時代前期末～中期初頭の溝が二条，多数の土壙・小穴を検出した。弥生時代前期末～後期の遺物が出土している。

Ⅳ区は，多数の土壙・小穴が検出した。弥生時代中期の遺物が出土している。

Ⅴ区は，弥生時代中期の掘立柱建物が１棟，多数の土壙・小穴を検出した。弥生時代中期の遺物が出土している。

Ⅵ区は，弥生時代中期の掘立柱建物が２棟，多数の土壙・小穴を検出した。弥生時代中期の遺物が出土している。

Ⅷ区からⅩ区にかけて，旧河川が２条，古墳時代初頭の溝を１条検出した。弥生時代中期から古墳時代初頭の遺物が出土している。

②土　　層

大別すると５層に分かれる。１層は，客土。２層は，農道建設以前の床土である。３層は，黒褐色系の土で弥生中期の遺構の覆土である。４ａ層は，古墳時代の層である。４ｂ層～４ｃ３層は，旧河道の水田を造る際の埋め土と考えられる。４ｆ層は，黒色の腐食土層である。５層は，粘質土の地山である。　　（西）

第２図　調査区位置図（１／250,00）

第３図　調査区配置図（１／2000）

(2) 遺　構

①掘立柱建物跡

今回の調査では，5棟の掘立柱建物跡を確認した。調査区の遺構確認面の幅が3.2mと狭いため，掘立柱建物跡が完全な規模で確認されたのは，2号掘立柱建物跡のみで，あとの4棟は東側の排水溝で切られていたり，西側の調査区外に入りこんだりで，建物跡を部分的にしか確認していない。

1号掘立柱建物跡

Ⅰ区～Ⅱ区にかけて確認された。長軸はW23°Nで，南西側の斜め半分は調査区の西壁に入りこむ。確認面で2間×3間の建物跡と思われる。長軸幅4.25m，短軸幅3.02mを測る。

2号掘立柱建物跡

Ⅱ区中央部で確認した。長軸は，ほぼ磁北に沿っている。今次調査で，建物跡の全域を，ほぼ確認できた唯一のものである。規模は2間×3間で，長軸幅5.1m，短軸幅2.92mを測る。北東隅と南東隅には，石製の礎盤が敷かれていた。なお，南東隅柱穴の，実際の堀り形は，波線で示した。建物跡の南側にある不整円形の大きな土壙（Ⅱ区土壙1）は底部が焼けていた。

3号掘立柱建物跡

Ⅴ区の北側で確認した。建物跡の北半部は，現代の排水溝によって損壊をうけているが，長軸は，N47°Eである。短軸幅は，3.8mを測る。南隅の柱穴とその北側の柱穴には石製の礎盤が敷かれていた。なお，当建物跡の北側の土壙，Ⅳ区土壙4の長軸の向きと，当建物跡の長軸の向きは一致しているようである。このⅣ区土壙4からは，弥生時代中期の土器やすり石等が出土した。後期の土器片の混入もみられた。Ⅴ区中央部の土壙から土製紡錘車が出土している。

4号掘立柱建物跡

Ⅵ区の北側で確認された。石製の礎盤が柱穴内にあったため，直角の柱穴の並びで特定した。部分的なため，長軸と短軸がはっきりしない。南北の確認幅が3.3m。東西の確認幅が2.6mを測る

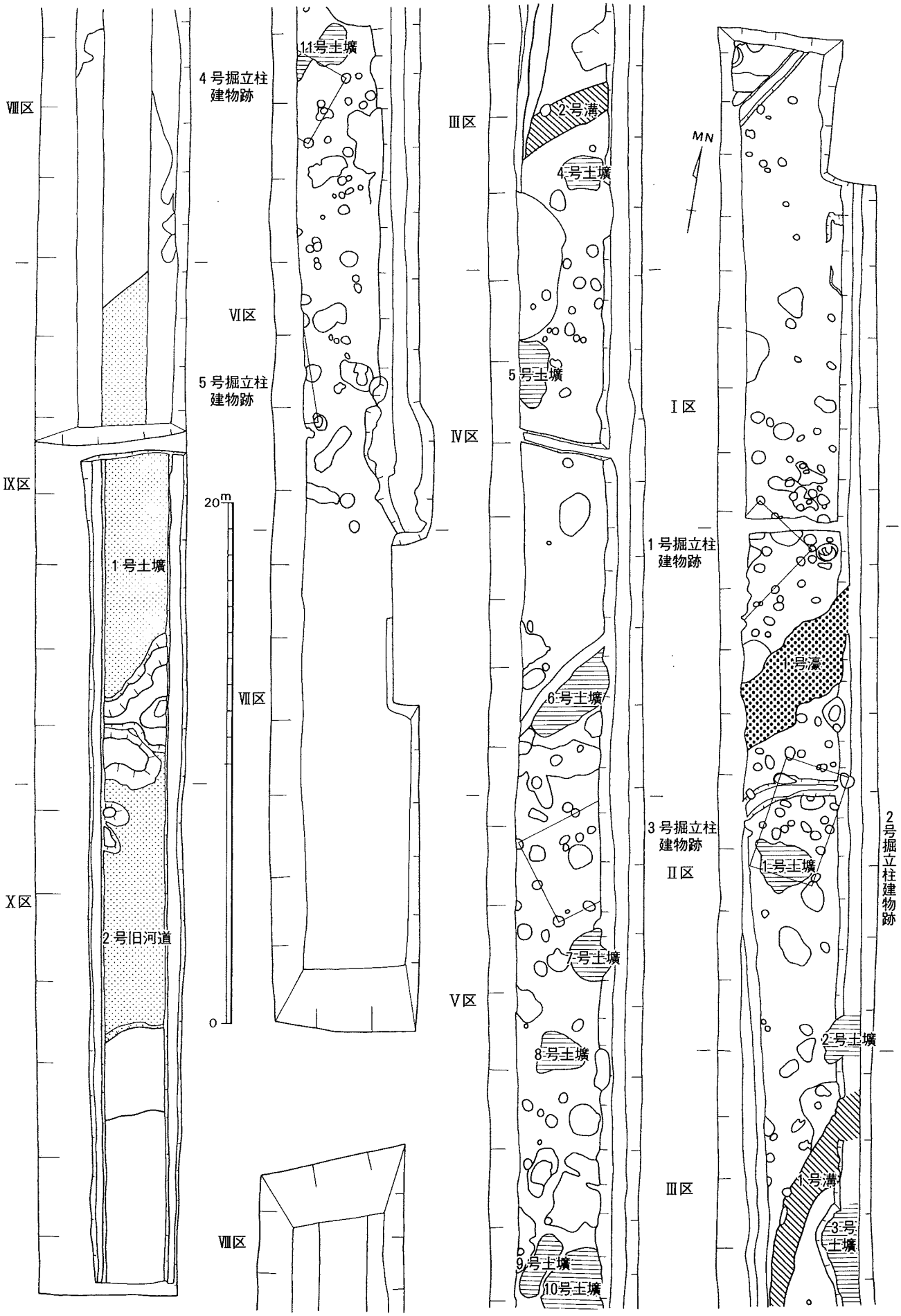
5号掘立柱建物跡

Ⅵ区の南側で確認した。調査区の西壁に沿う形で3個の柱穴が並んでいる。柱穴の直径が60cm程で，他のものより大きい。

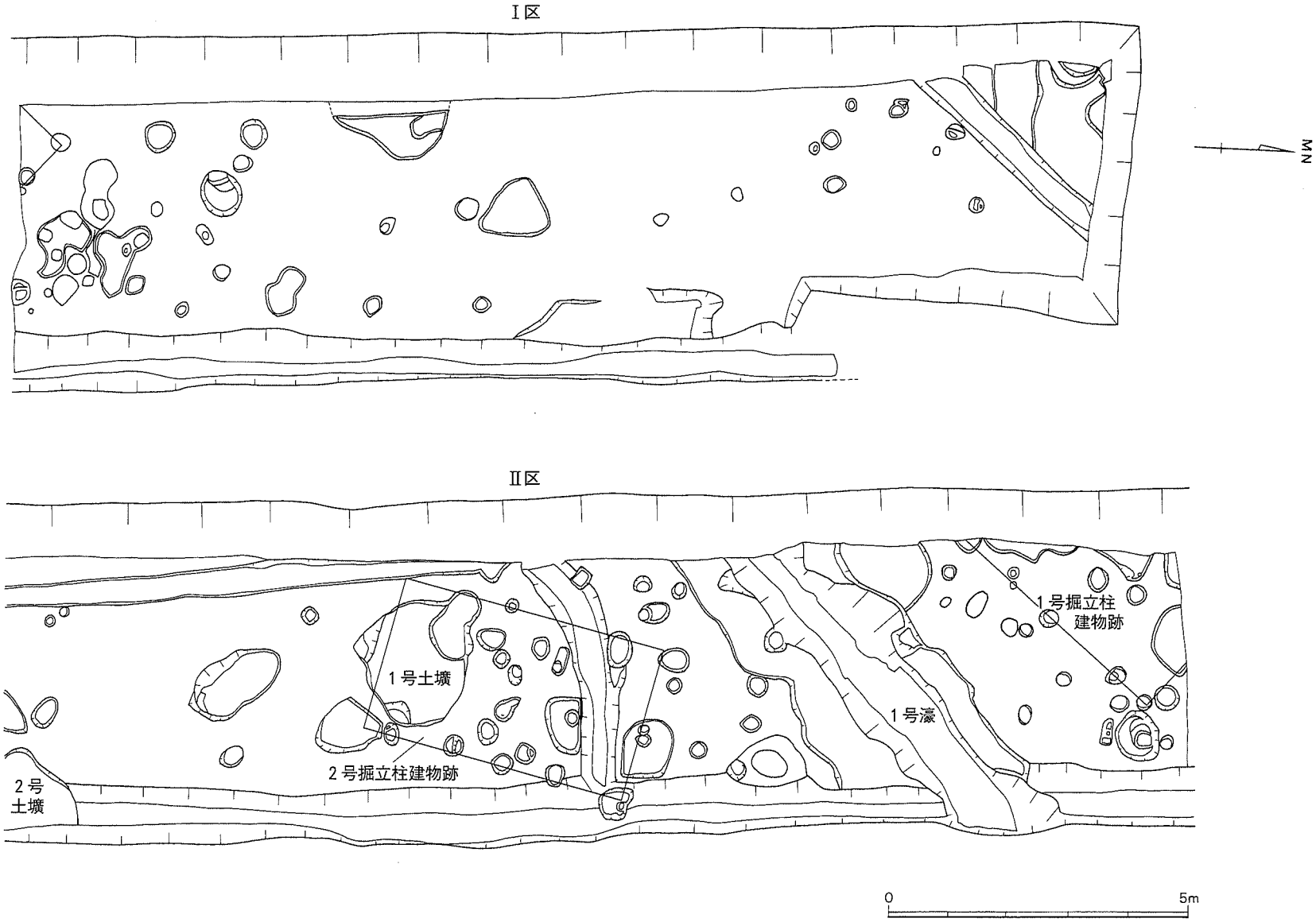
②旧河道（Ⅶ～Ⅹ区）

Ⅶ区から南は，地盤高が30cmほど下がり灰褐色粘質土層が，その上に乗っている。Ⅶ区では南端では弥生時代中期の土器等が集中するものの，その場所以外は，ほとんど遺物は出土しない。

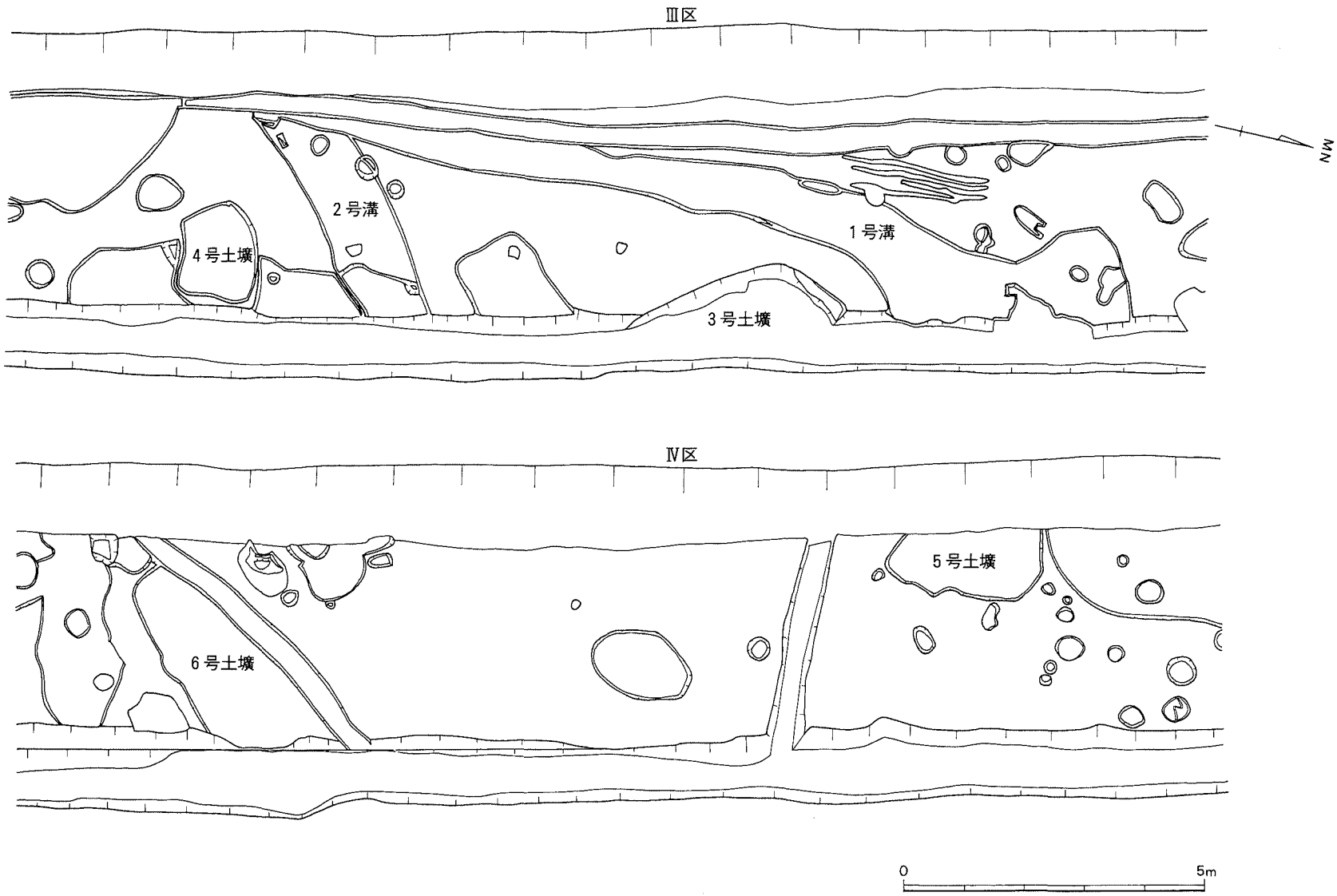
Ⅷ～Ⅹ区にかけては，Ⅶ区以上に地盤高が下がっていき，Ⅷ～Ⅹ区の中間点あたりまでは，Ⅶ区よりさらに1.2m程下がり，底面には川砂利の堆積があるところから旧河道と判断された。この旧河道の中でも微地形の変化があり，灰色粘質土層の畦状の高まりがある。Ⅷ区土層図の4層がその畦状の高まりということになる。そして，その中に木葉等の有機質をたくさん含んだ地層の流入が認められ，この有機質を含む暗緑灰色粘質土層等の水平堆積がある。この灰色粘質土層の畦状の高まりはⅨ区の中程にも存在し，1号旧河道，2号旧河道と分けている。1号旧河道の方には有機質を含む暗緑灰色土



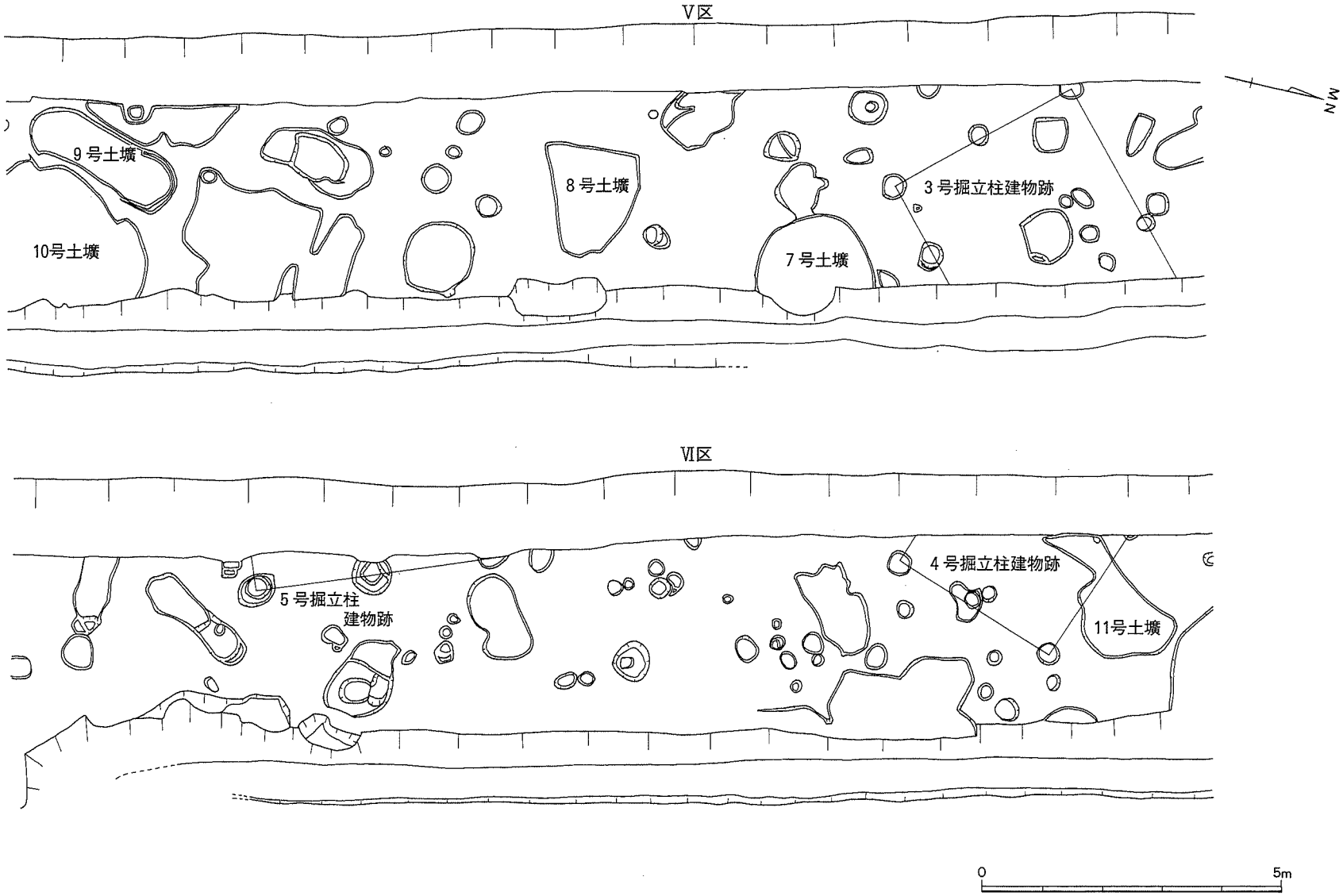
第4図　遺構配置図（1／200）



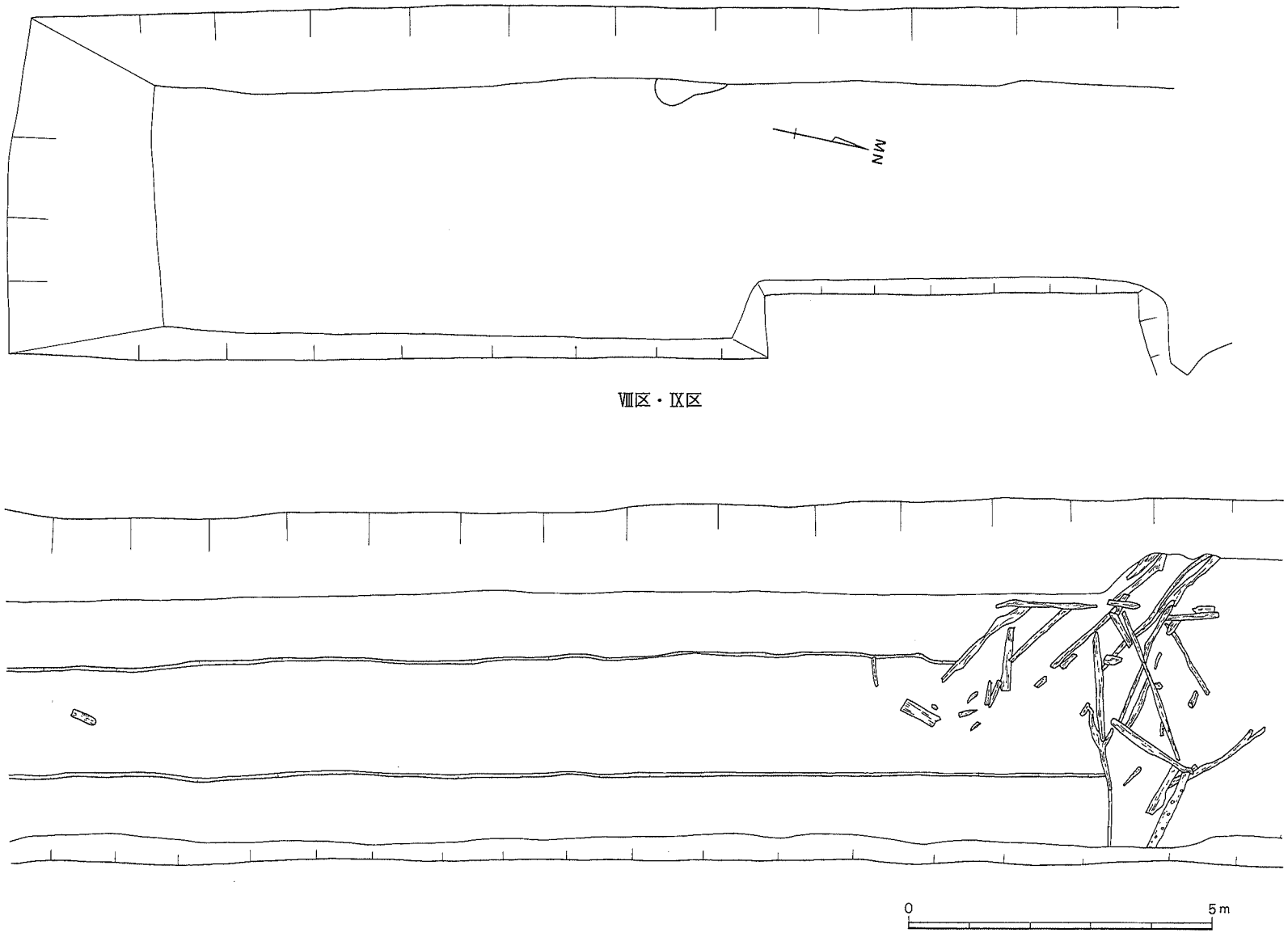
第5図　調査区平面図①（1／100）



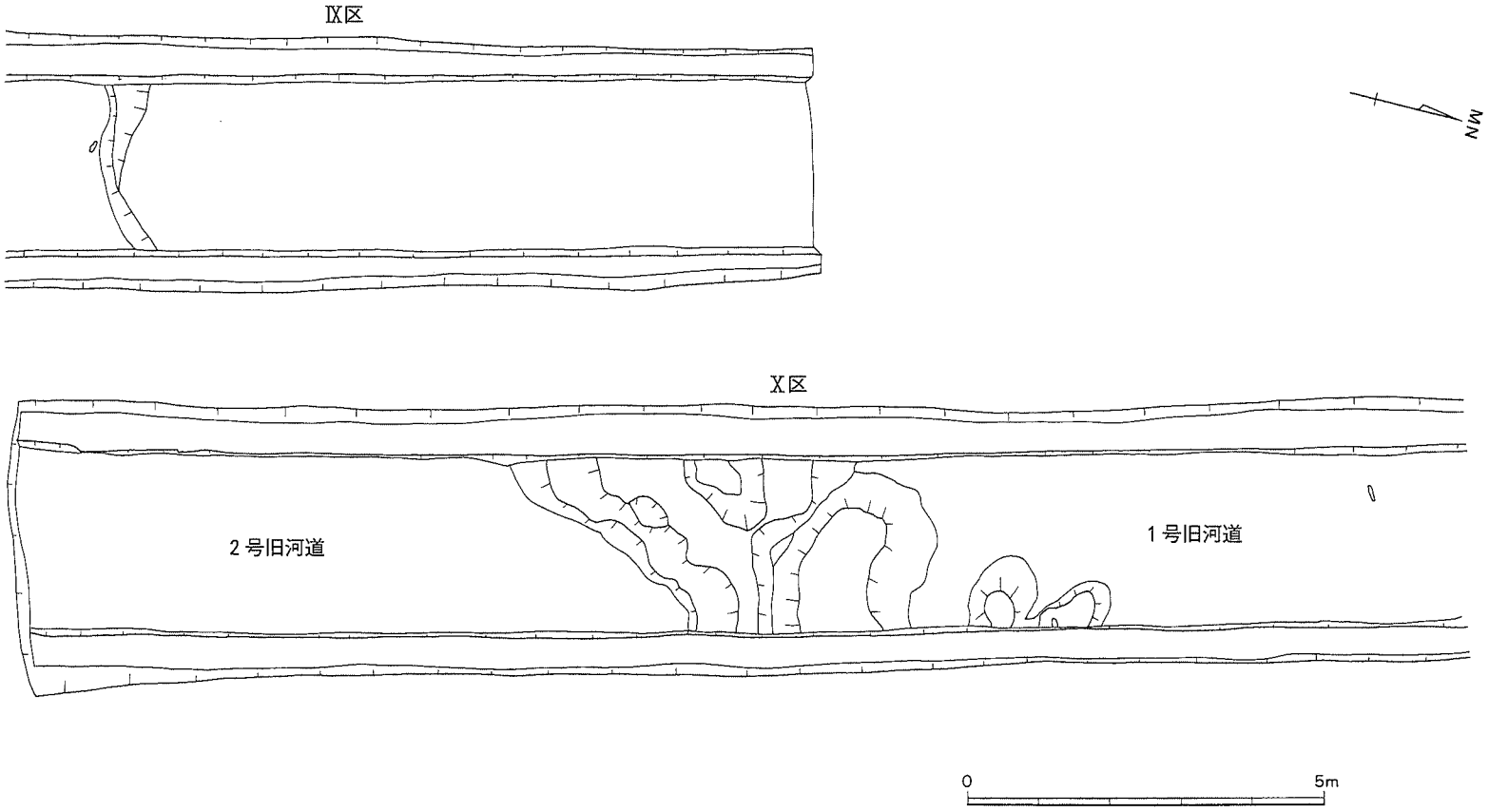
第6図　調査区平面図②（1／100）



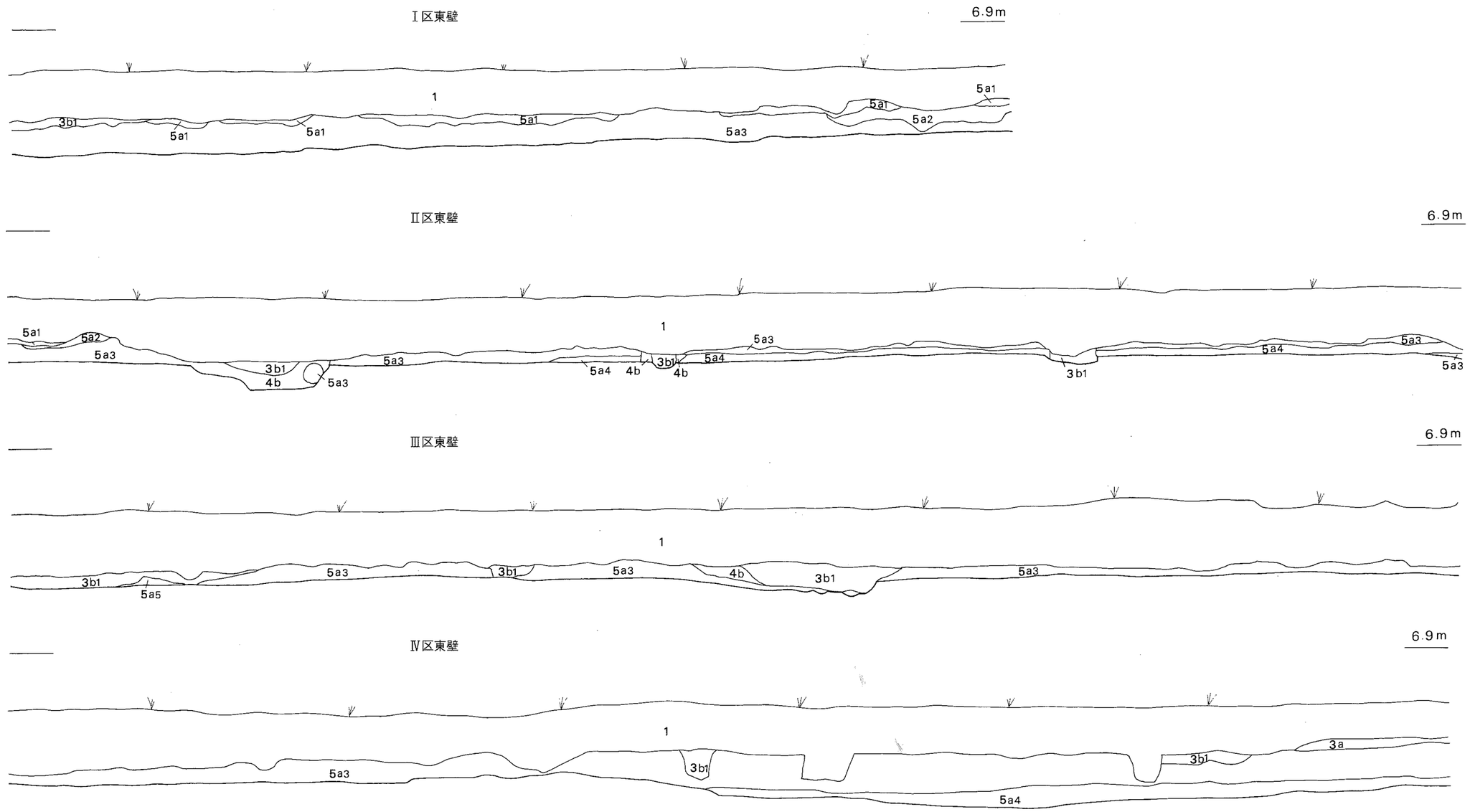
第7図　調査区平面図③（1／100）



第8図　調査区平面図④（1／100）



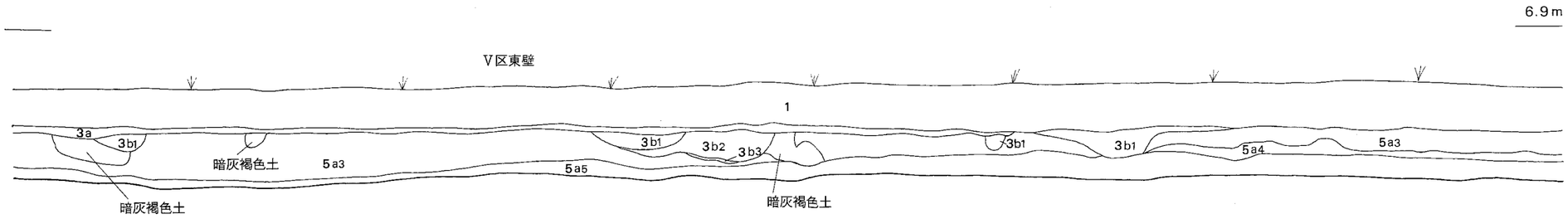
第9図　調査区平面図⑤（1／100）

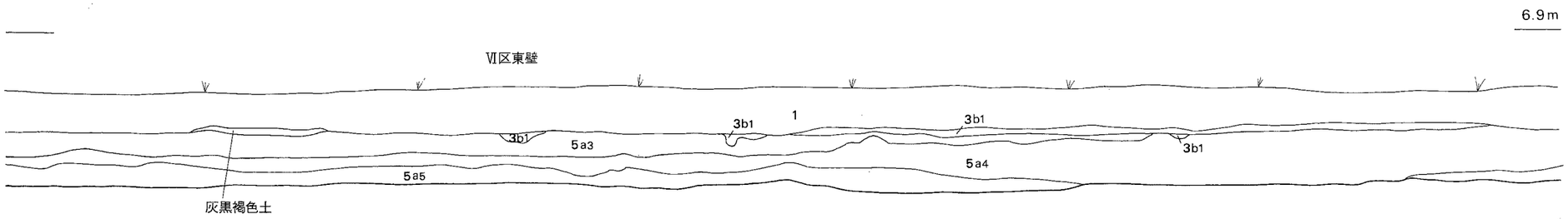


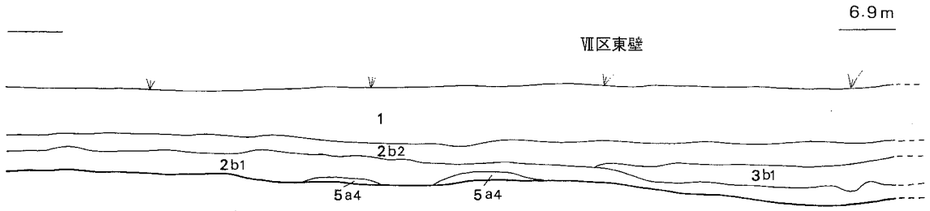
1　客土
2a　黄褐色土
2b1 灰褐色土
2b2 灰黒色土
2b3 暗灰色土
3a　暗黒褐色土
3b1 黒褐色土（弥生時代中期包含層）
3b2 灰黒褐色土
3b3 灰黒褐色土
4a　灰色粘質土
4b　淡灰褐色粘質土
4b1 灰黒色粘質土
4b2 黒灰色粘質土（弥生時代中期～古墳時代初頭の包含層）
4c1 暗緑灰色粘質土
4c2 暗黄灰色弱粘質土
4c3 淡黄灰色砂層
4f　黒色腐食土層
5a1 暗褐灰色粘質土
5a2 褐色粘質土（黒斑が入っている）
5a3 褐灰色粘質土
5a4 赤橙色土（酸化第二鉄）
5a5 灰色粘質土
5a6 暗褐色土

0　5m

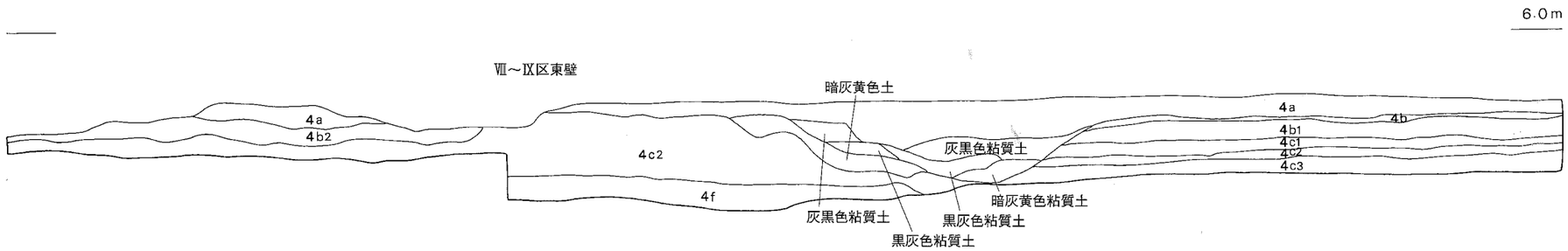
第10図　調査区土層図①（1／60）

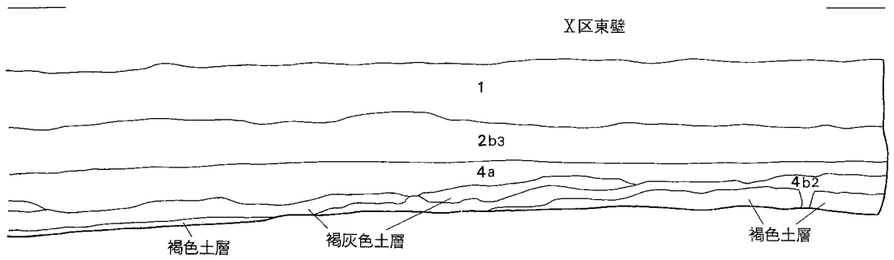




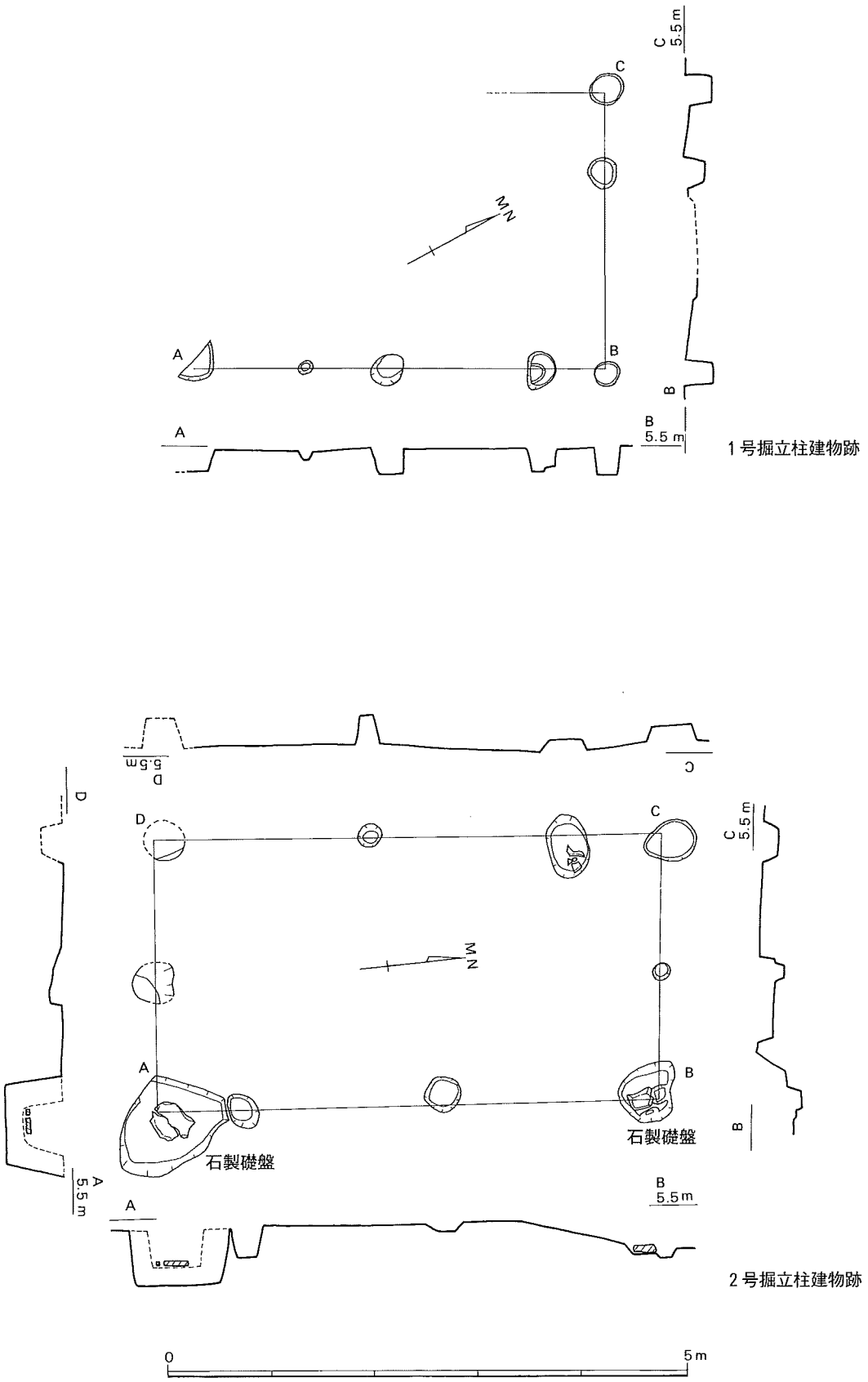


1　客土
2a　黄褐色土
2b1　灰褐色土
2b2　灰黒色土
2b3　暗灰色土
3a　暗黒褐色土
3b1　黒褐色土（弥生時代中期包含層）
3b2　灰黒褐色土
3b3　灰黒褐色土
4a　灰色褐色土
4b　淡灰褐色粘質土
4b1　灰黒色粘質土
4b2　黒灰色粘質土（弥生時代中期～古墳時代初頭の包含層）
5a1　暗褐灰色粘質土
5a2　褐色粘質土（黒斑が入っている）
5a3　褐灰色粘質土
5a4　赤橙色土（酸化第二鉄）
5a5　灰色粘質土
5a6　暗褐色土
4c1　暗緑灰色粘質土
4c2　暗黄灰色弱粘質土
4c3　淡黄灰色砂層
4f　黒色腐食土層

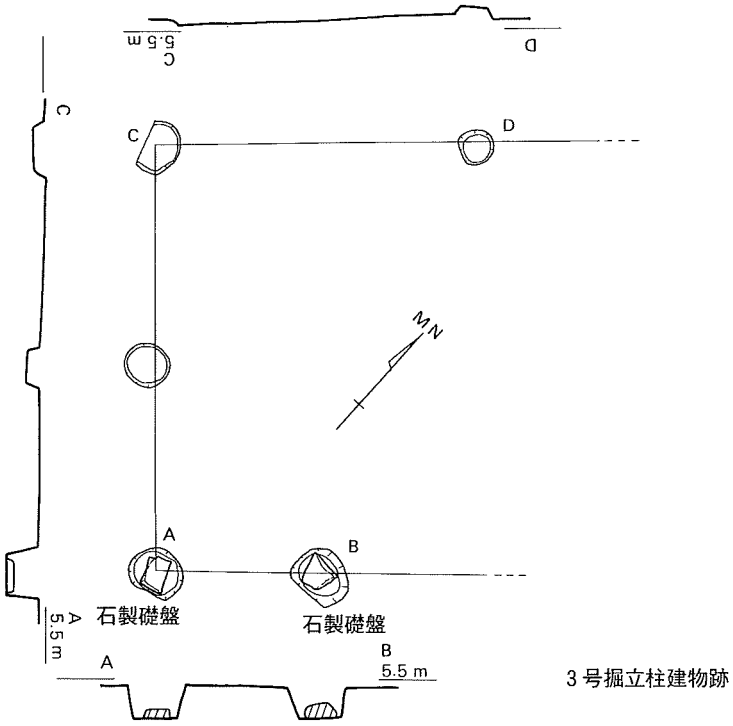


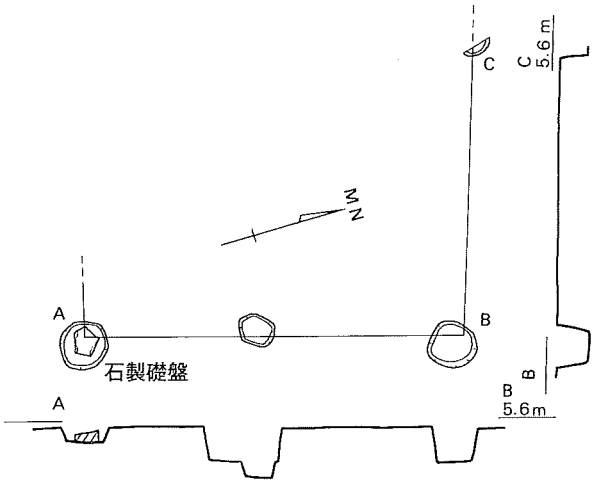


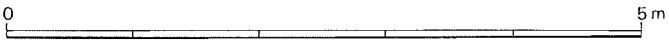
第11図　調査区土層図②（1／60）



第12図　掘立柱建物跡実測図①（1／60）







第13図　掘立柱建物跡実測図②（1／60）

層等の水平堆積があるが，２号旧河道のほうには，１号のような粘質土層の水平堆積は認められない。

Ⅷ区の北側の木器・木材等の集中した場所では，長さ３m19cm，幅12cm，厚さ2.6cmの建築部材が出土した。他に竪杵や鉄製の鎌が木製の柄に装着したままの状態で出土した。出土する土器は，上層の４ｂ層からは土師器が出土し，その下層からは，弥生時代中期の土器が多く出土する。後期の土器も混入している。Ⅶ区の南側では，北東から北西の傾きの，古墳時代前期頃のものとみられる溝（この場所では遺物の出土はなかったものの，特定調査のＦ調査区で同様の規模のものが，古墳時代前期の溝として確認されており，同様のものと考えられる。）が検出された。

③濠

１号濠　（第４・15図，図版２・３）

Ⅱ区から検出した東西方向に延びる濠である。東側は，昭和期の水路に切られている。長さ5.8m，幅約2.7m，深さ約0.75mを測り，断面はＶ字状を呈する。覆土は，10層に分かれている。上層からは，流れ込みによって弥生中期の遺物が出土，炭化物を含む黒褐色の中層からは，土師器が出土した。地山は，褐灰色・灰緑色の粘質土である。また，弥生中期の土壙を切っており，この濠の時期は，弥生後期と考えられ，古墳時代前期にはその役目を終えて廃棄されたものと思われる。

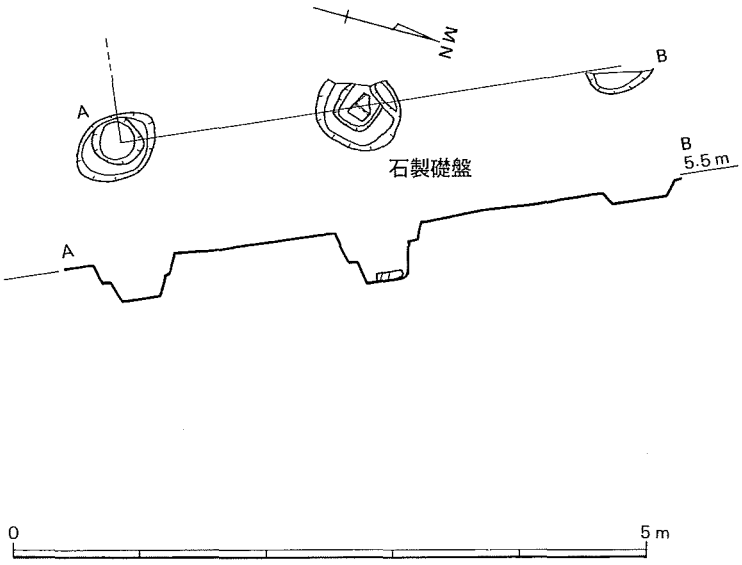
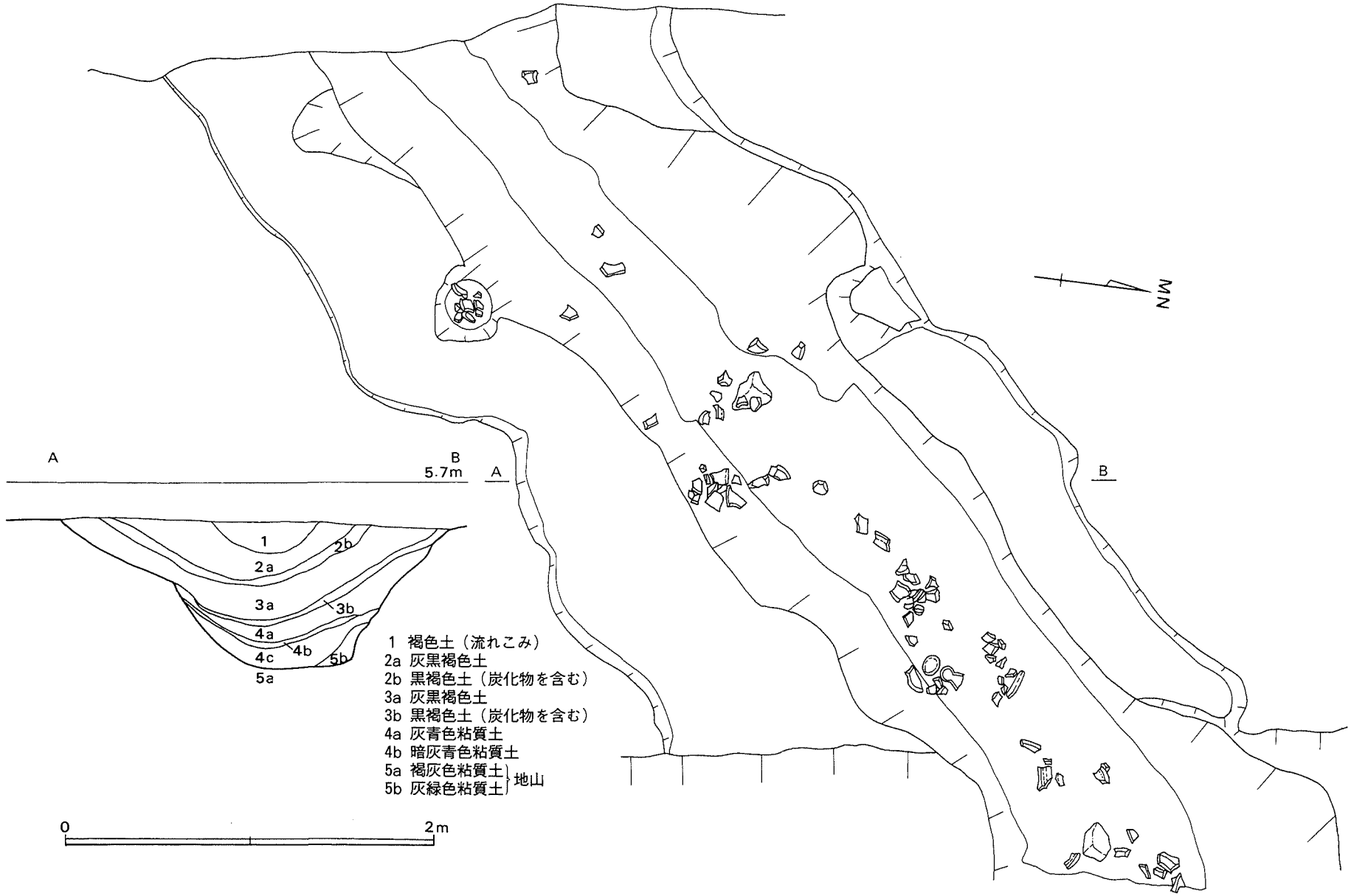
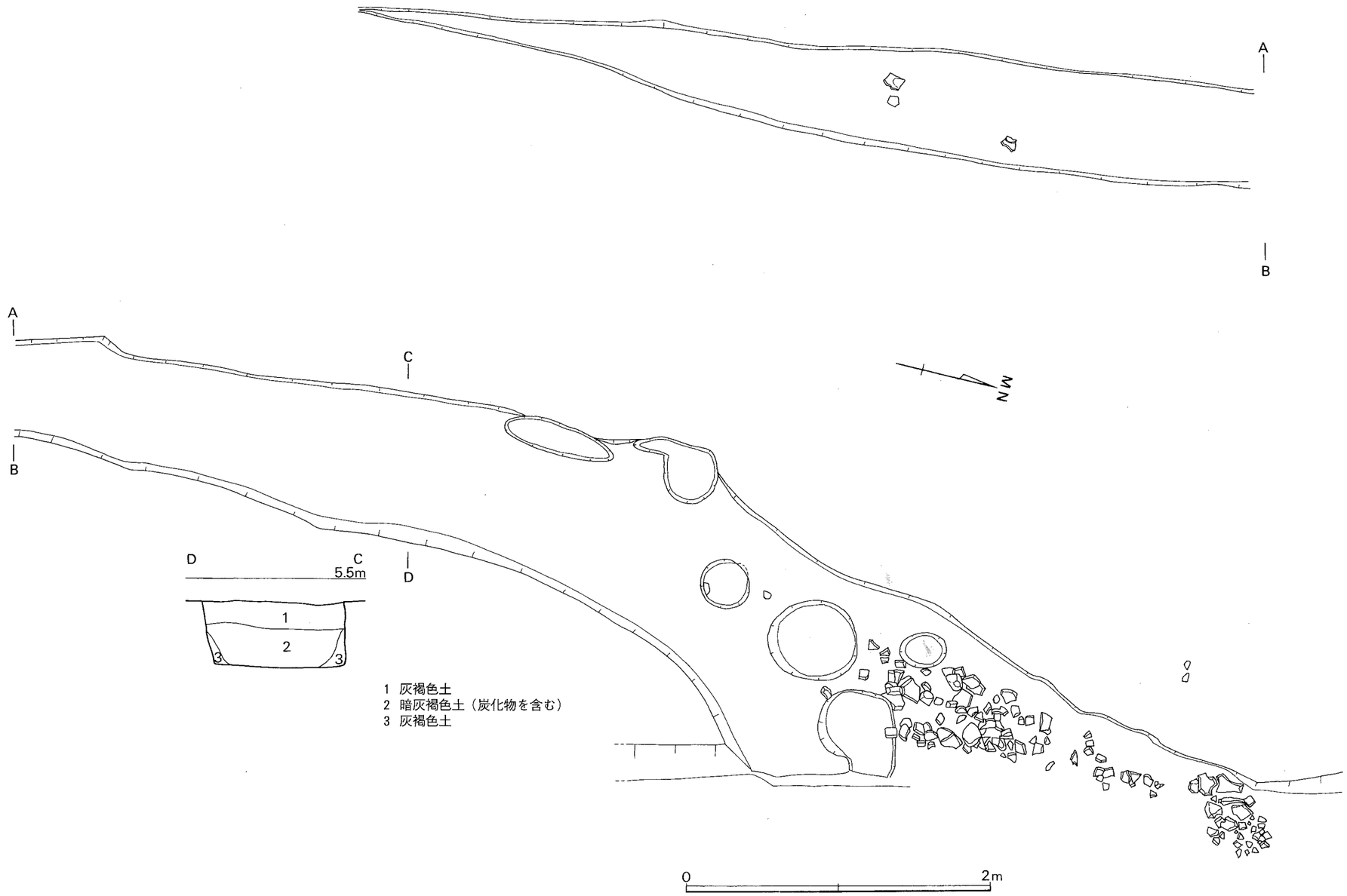


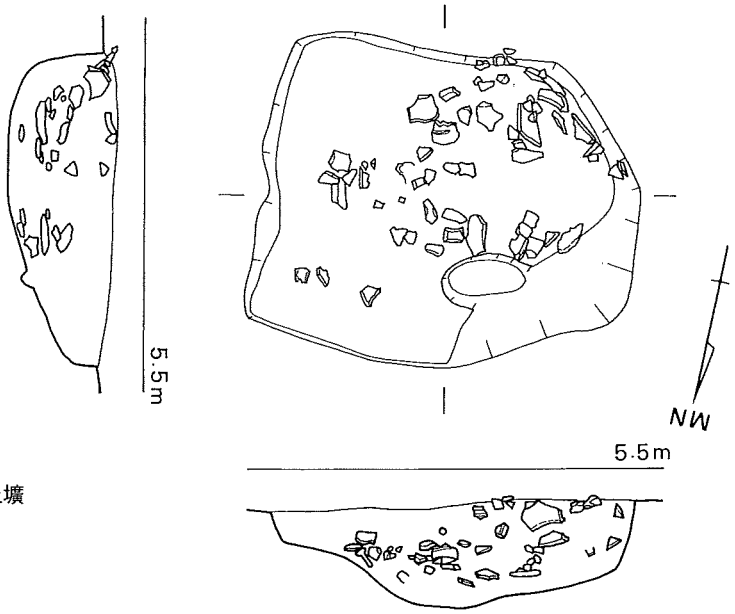
図14　掘立柱建物跡実測図③（１／60）



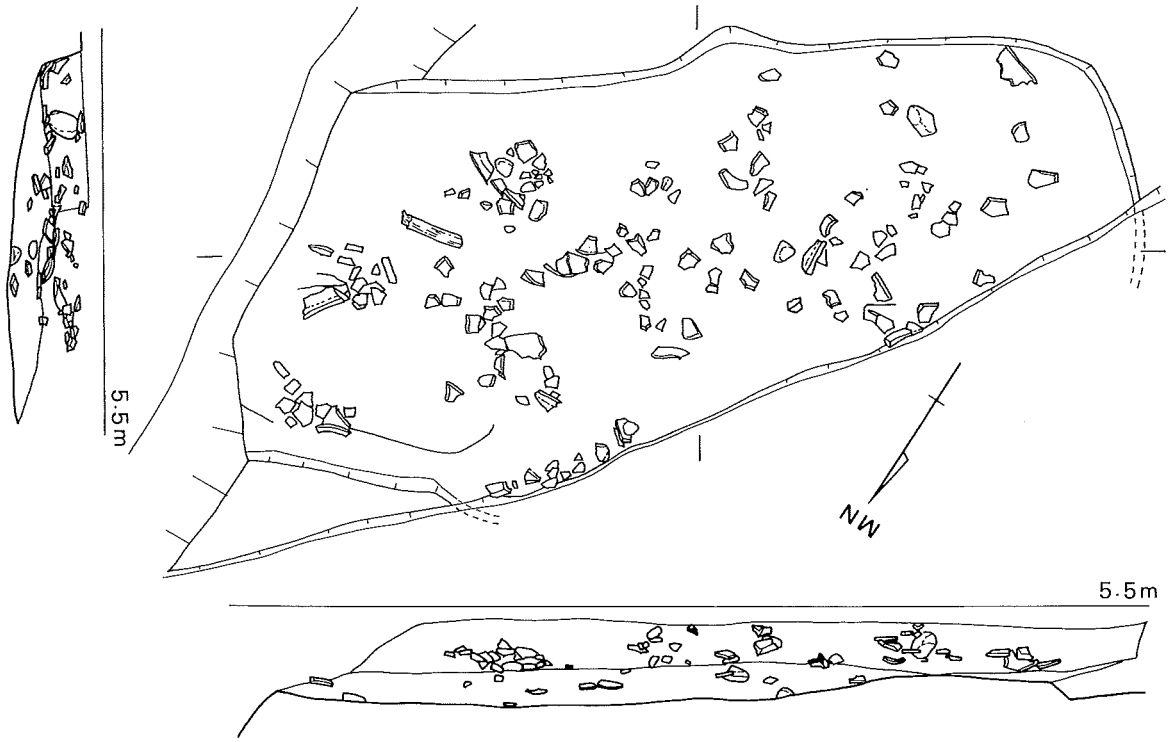
第15図　1号濠実測図（1／30）



第16図　1号溝実測図（1／30）



4号土壙



6号土壙

0　2m

第17図　土壙実測図（1／30）

④溝

1号溝　(第4・16図，図版3)

Ⅲ区から検出した北東から南西方向に延びる溝である。長さ14m，幅1.0m～3.2m，深さ約0.43mを測り，断面はU字状を呈する。覆土は2層に分かれ，炭化物を含む2層から，弥生時代前期の板付Ⅱ式の土器が出土しており，この溝は，弥生時代前期の溝と考えられる。

2号溝　(第4図，図版3)

Ⅲ区から検出した東西方向に延びる溝である。西側は，昭和期の暗渠に切られている。長さ3.75m，幅約1.25m，深さ約0.36mを測り，断面はU字状を呈する。溝内から無文土器が1点出土しており，弥生時代前期末から中期初頭の溝と考えられる。

3号溝

1号旧河道から検出した溝である。弥生時代に埋め立てられた後に，古墳時代になって埋め立てた層を切る形で掘られている。上面幅約4.5m，下面幅約2.0m，深さ約0.5m，断面は，U字状を呈す。

⑤土壙

1号土壙　(第4図，図版2)

Ⅱ区から検出した。平面は，隋円形を呈する。長さ2.04m，幅1.87m，深さ約0.35mを測る。丹塗の甕など，弥生中期の遺物が出土している。

2号土壙　(第4図，図版2)

Ⅱ区から検出した。平面は，不整形を呈する。長さ2.28m，残存幅0.7m，深さ約0.39mを測る。丹塗の甕など，弥生中期から後期にかけての遺物が，出土している。

3号土壙　(第4図，図版3)

Ⅲ区から検出した。平面は，不整形を呈する。長さ3.25m，残存幅0.72m，深さ約0.5mを測る。丹塗の甕など，弥生中期の遺物が出土している。

4号土壙　(第4・17図，図版3)

Ⅲ区から検出した。平面は，隅丸長方形を呈する。長さ1.47m，幅1.27m，深さ約0.45mを測る。弥生中期から後期の遺物が出土している。

5号土壙　(第4図，図版4)

Ⅳ区から検出した。平面は，隅丸長方形を呈する。長さ2.64m，残存幅1.22m，深さ約0.2mを測る。丹塗の甕など，弥生中期の遺物が出土している。

6号土壙　(第4・17図，図版4)

Ⅳ区から検出した。平面は，隅丸長方形を呈する。長さ3.24m，残存幅1.52m，深さ約0.35mを測る。丹塗の甕など，弥生中期の遺物が出土している。

7号土壙　(第4図，図版4)

Ⅴ区から検出した。平面は，隋円形を呈する。長さ1.75m，残存幅1.55m，深さ約0.36mを測る。丹塗の甕など，弥生中期の遺物が出土している。

8号土壙　（第4図，図版4）

Ⅴ区から検出した。平面は，隅丸の台形状を呈する。長さ1.83m，幅1.60m，深さ約0.13mを測る。丹塗の甕など，弥生中期の遺物が出土している。土製の紡錘車が1点出土している。

9号土壙　（第4図，図版4）

Ⅴ区から検出した。平面は，隅丸長方形を呈する。長さ2.57m，幅0.87m，深さ約0.22mを測る。丹塗の甕など，弥生中期の遺物が出土している。

10号土壙　（第4図，図版4・5）

Ⅴ区から検出した。平面は，隋円形を呈する。長さ3.0m，残存幅2.4m，深さ約0.31mを測る。弥生中期から後期の遺物が出土している。

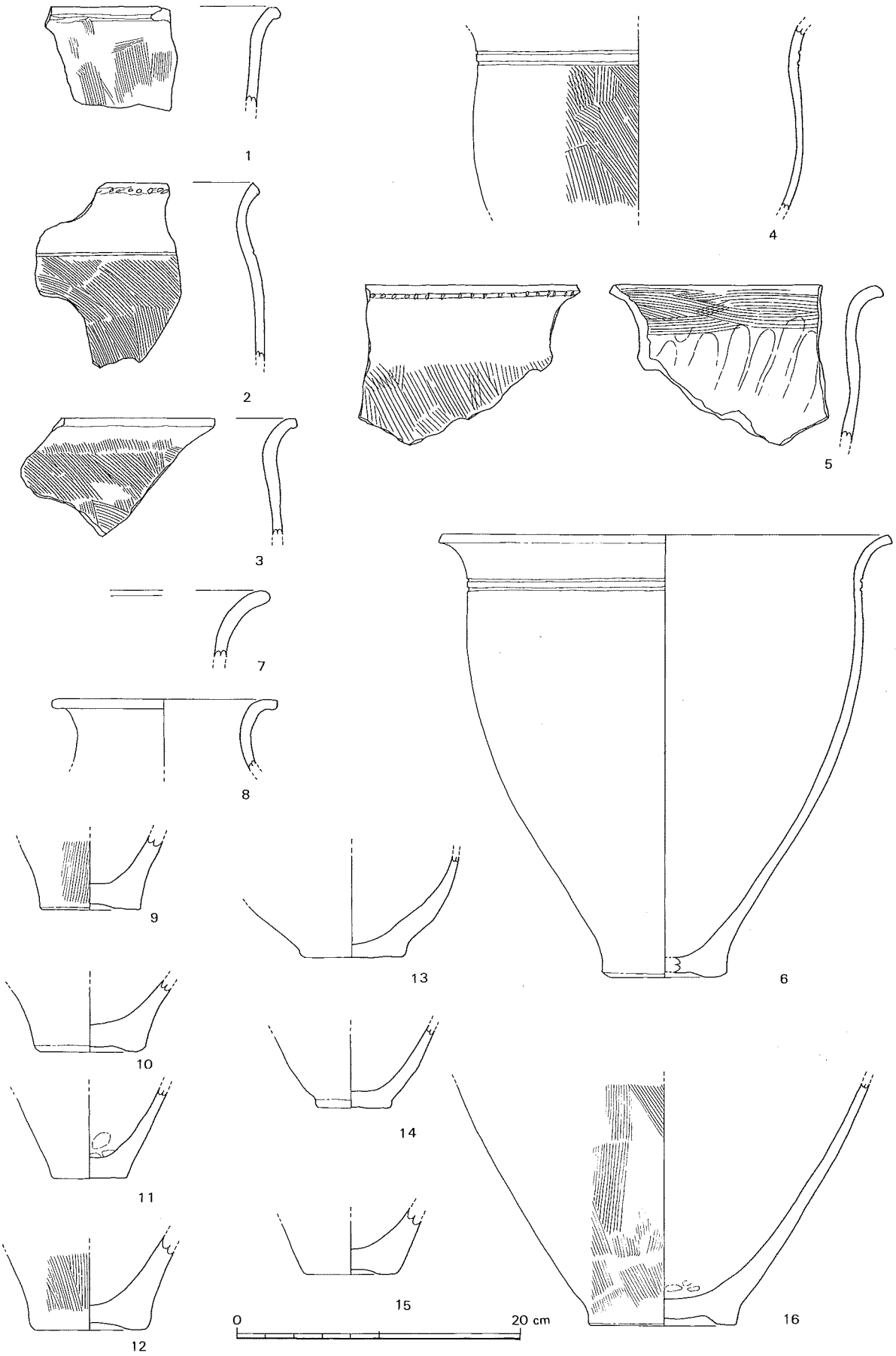
11号土壙　（第4図，図版5）

Ⅵ区から検出した。平面は，不整形を呈する。長さ2.4m，幅1.4m，深さ約0.18mを測る。丹塗の甕など，弥生中期の遺物が出土している。

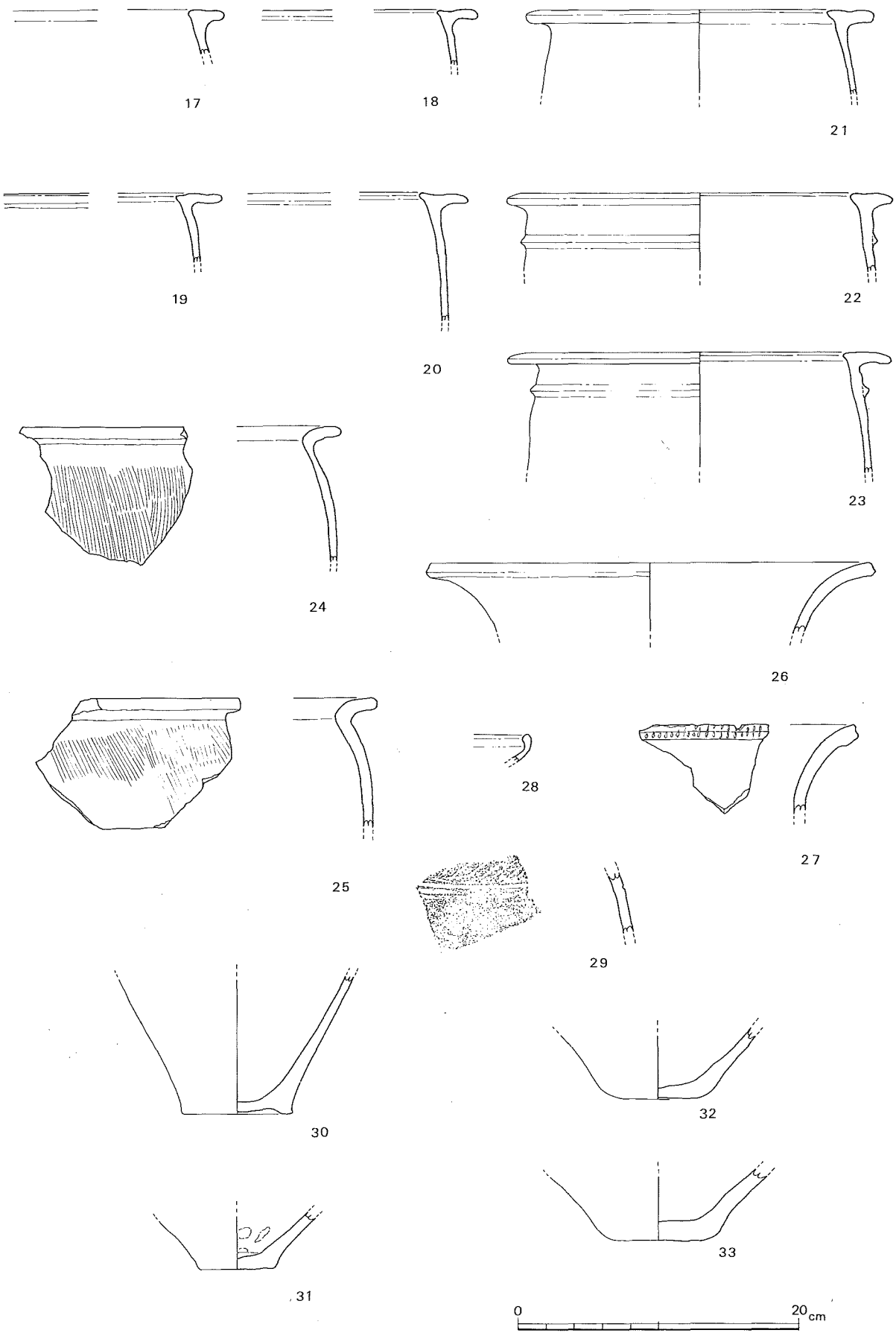
(3)　出土遺物

図版では，今次調査の出土土器として，弥生時代前期・中期・後期，古墳時代前期の土器を掲載しているが，実際的には弥生時代中期の須玖式土器がほとんどで，他は弥生時代前期，同後期，古墳時代前期等のものが，少量出土しているのみである。弥生時代前期のものは，1号溝に限定されるし，後期のものはⅣ区の6号土壙に1点の混入があるのと，Ⅷ区の北側から若干出土するくらいである。古墳時代前期のものは，1号濠や，Ⅷ区の4 b_2層上位に限られている。この1号濠や溝，そして，Ⅷ区の4 b_2層以外の土壙や柱穴群（掘立柱建物跡）のまわりからは，須玖式土器が出土している。

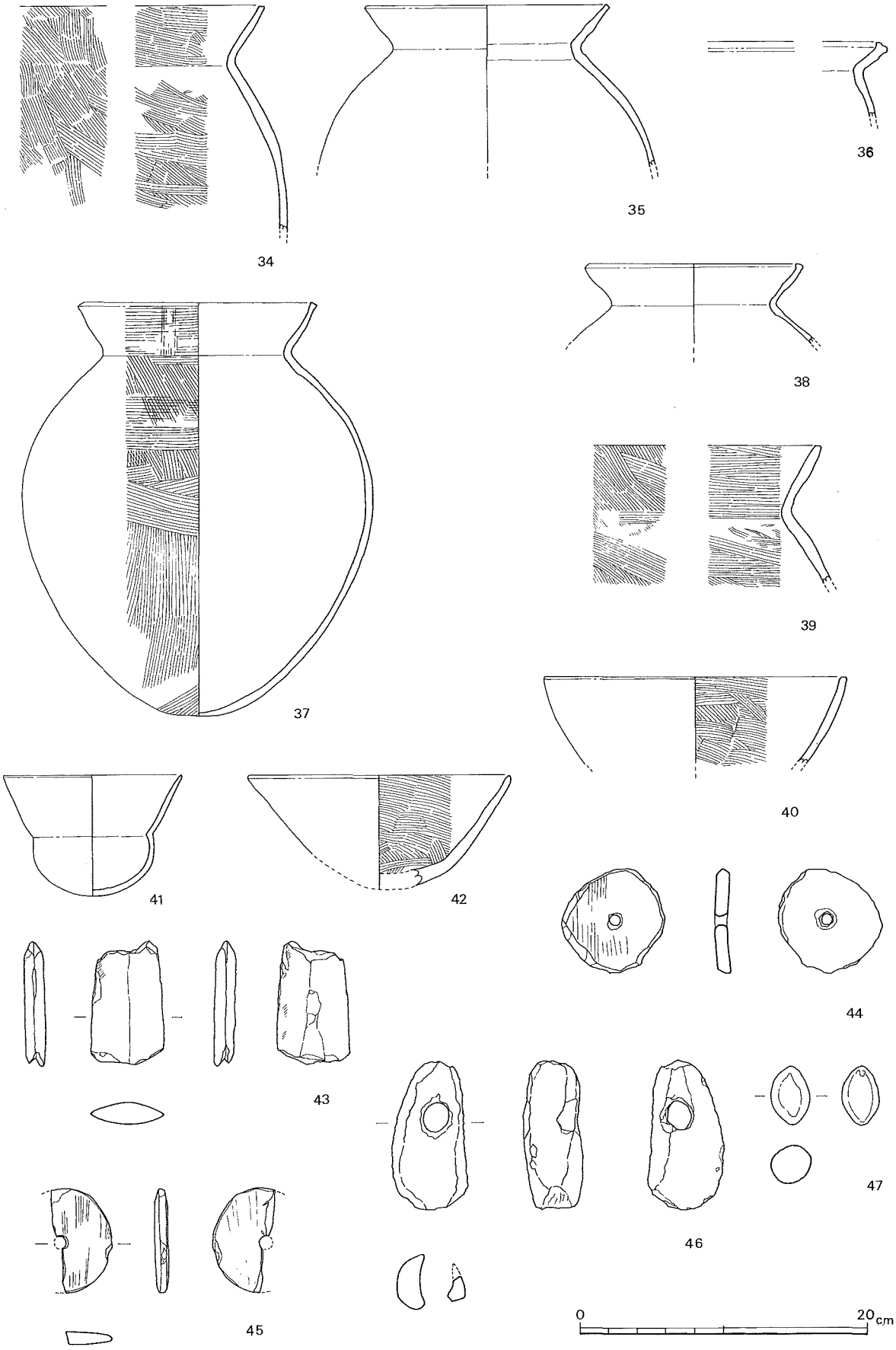
1～16は，弥生時代前期の如意形口縁の甕と壺である。2と13以外の14点は，Ⅲ区の1号溝の東端でまとまって出土した。原の辻遺跡では，今までのところ前期の資料が少ないので掲載したものである。1は，胎土の色がにぶい橙色（7.5YR6/4）で，長石・石英粒・金雲母・黒色粒が混じっている。全体にうすく煤けている。2は，肩部に沈線をもつもので，その下に刷毛目が残っている。口縁端部下段にヘラによる刻目をもっている。胎土の色は橙色（5YR）で，長石・石英粒・金雲母・黒色粒が混じっている。3は，胎土の色が橙色（5YR7/6）で，長石・石英粒・金雲母がまじり，胎土は荒い。内面は指おさえのあとナデている。4は，肩部に2本の沈線をもち，その下は刷毛目を施す。胎土はにぶい橙色（5YR6/4）で、長石・石英粒・金雲母を含む。5は，口縁端部下端に刻目をもっている。胎土の色は橙色（5YR6/6）で，胴部内面に指おさえ痕がついている。6は，全体の器形がわかる資料である。胎土の色は灰白色（10YR8/2）で，長石・石英粒・金雲母が混じっている。風化が進んでいて調整痕がわかりにくい。7と8は壺の口縁部である。7は，胎土の色が浅黄橙色（7.5YR8/4）で，長石・石英粒・金雲母・黒色粒を含む。8は，口縁端部を外方に引き出すものである。端部下面には指おさえの跡がついている。9～12，15は甕の底部である。13，14は朝鮮半島系の無文土器の底部と思われるものである。13は，Ⅷ区の4 b_2層からの出土である。胎土の色は灰白色（2.5Y7/1）で，胎土の混入物はきめ細かく，ちょっと見ただけではわからないが，微少な金雲母・角閃石が若干混入し



第18図　出土土器①（1／4）



第19図　出土土器②（1／4）



第20図　出土土器③及び石器等（1／4）

ている。内面は，指で成形した後，ヘラで押さえたり，横ナデしている。表面が風化しているが，刷毛目が残っている。14は，Ⅲ区の２号溝からの出土である。胎土の色はにぶい黄橙色（10YR7/4）で、細かな石英粒・金雲母・角閃石が混じっている。内面に煤痕がついている。底部及び内底は、いびつで，左右非対称及び傾いている。16も甕の底部であるが，上げ底の度合いが一番強い。胎土の色は，にぶい黄橙色（10YR7/3）で，長石・石英粒・金雲母等が混入している。

17～23，26，27，30～33は，弥生時代中期の須玖式土器の甕と壺である。24，25，27がⅡ区１号濠内，28が，Ⅷ区の４ｂ$_2$層，29は，Ⅲ区の１号溝からの出土である。それ以外の14点は，Ⅳ区６号土壙からの出土である。他の土壙も，このⅣ区６号土壙出土土器とほぼ同時期になる。

17は，口縁部の横への張り出しが弱いもので，胎土の色は，にぶい橙色（7.5YR6/4）で，長石・石英・金雲母が混入している。17は，胎土の色が淡橙色（5YR8/3）で，長石・石英粒・金雲母等が混入している。24，25は，口縁部の傾きの立ち上がりがあまりみられないので，中期末のものであろう。Ⅱ区の１層，流れ込み層の出土である。24は，胎土の色が灰色（7.5YR8/1）で，長石・石英粒・金雲母を含む。25に比べ薄手であるが，特に口縁直下の頚部は薄い。25は，胎土の色がにぶい橙色(7.5YR6/4）で，長石・石英粒・金雲母を含むが，石英粒の粒が大きく目立つ。刷毛目も口縁直下まで施す。27は，壺の口縁部で口縁の下面を肥厚させている。口縁端部にヘラによる刻目を入れた後，浅い沈線状のものを横に施す。28は，灰色の陶質土器の口縁部片である。わずかに石英粒が混じっている。29は，胎土の色は灰白色(2.5Y8/2)、石英粒は含むが，金雲母は見あたらない。沈線よりうえに貝殻腹縁による羽状文が入る。30は，甕の底部，胎土の色はにぶい黄橙色（10YR7/3）で，　長石・石英粒・金雲母が混入する。断面で粘土の継ぎ目がわかるが，まず，漏斗状の外縁をつくり，その後内側から粘土をふさいで底部としている。内底面に指押さえの跡がついている。上げ底となっている。31～33は，壺の底部である。３点とも 長石・石英粒・金雲母を含む。

34～42は，古墳時代前期の土師器である。35，36，41がⅡ区１号濠の２ｂ層の出土で，それ以外は，１層の出土である。34の胎土の色は，にぶい橙色(7.5YR6/4)で，ごく僅かの金雲母と微少な石英粒を含む精良な粘土を使用している。内外面とも現存部全面に刷毛目を施す。35は，壺で胎土の色は灰黄色（2.5Y）で，胴部内面をヘラ削りしている。外面は横方向の刷毛目調整を行う。36は，はね上げ口縁壺の口縁片で，胎土の色は橙色（5YR7/6）で，長石・石英粒が混じる。37は壺で，胎土の色はにぶい黄橙色（10YR7/2）で，　長石・石英粒・金雲母を含む。口縁部内面はヨコナデ，それより下はヘラ削り調整している。外面全体に煤の付着がある。38の胎土の色はにぶい黄橙色（10YR7/2）で，胴部内面はヘラ削りしている。39は34と同一個体ではないかと思われる資料である。胎土・色調とも同一。40は鉢で，胎土の色は，にぶい黄橙色，細かな石英粒と金雲母を混入している。内側は丁寧な横方向の刷毛目調整を行っている。41は丸底坏で，胎土の色は浅い黄橙色（10YR8/3）で，42は丸底の鉢である。胎土の色はにぶい橙色（7.5YR7/4)、石英粒や金雲母が僅かに混じる。微量の石英粒・金雲母を混入する。

43は，石剣である。Ⅷ区４ｂ$_2$層の出土。全体に風化しており研ぎ部分もはっきりしない。残存部で

37ｇ。44は土製紡錘車である。Ⅴ区中央部の土壙出土。45は石製の紡錘車である。Ⅷ区の４ｂ$_2$層の出土。46は用途不明の穿孔ある石製品である。Ⅱ区の土壙１出土。47は土製品である。Ⅴ区の８号土壙出土。（村川）

３．まとめ

今回の，農道建設に伴う調査の区域は，同年度に調査された特定調査の調査区と隣接している。また，平成８年度に調査された原の辻遺跡・八反地区の調査ともⅧ区で隣接している。

結果的には，特定調査Ｂ区の７号濠と，この農道調査のⅡ区１号濠とつながる可能性があり，同じくⅢ区の１，２号溝がそれぞれ特定調査，Ｂ区の７，５号溝とつながる可能性がでてきた。

そして，今回の調査で掘立柱建物跡を５棟確認した訳であるが，低地部における居住の形態が少しわかってきたのではないだろうか。なお，柱穴の底部には石製の礎盤を敷いており，今のところ九州本土等では，木製の礎盤はあっても，石製のものは知られていないようである。

各時期ごとに整理してみると，まず，弥生時代前期末～中期初頭の溝があり，その後，須玖式土器の段階に掘立柱建物跡があり，後期の段階で，１号濠が掘られ，古墳時代前期にこの濠が使われなくなって土師器が廃棄されたということになる。出土遺物のところでも触れたように，土壙内や掘立柱建物跡周辺から出土するのは，ほとんどが弥生時代中期の須玖式土器であり，今回の調査区，特にⅠ区～Ⅶ区においては弥生時代中期に主体的な活動時期があるといえよう。

Ⅶ区から南にいくと状況は一変し，沼状ないしは，旧河道が確認された。Ⅷ区の西側に設定された八反地区の調査でも，沼状の遺構が確認されている。

旧河道であるⅧ区では，建築部材や竪杵，柄に装着したままの鉄鎌等が出土した。このⅧ区～Ⅸ区にかけての１号旧河道では，有機質を含んだ４Ｃ$_1$層の暗緑灰色（暗オリーブ色）の粘質土層の水平堆積が認められた。河道の岸には多量の広葉樹の葉が堆積していた。２号旧河道にはこういった粘質土層の水平堆積は認められなかった。また，この１号旧河道の北側で，古墳時代前期のものと思われる溝も確認した。

今時調査の成果としては，５棟の掘立柱建物が確認できたことと，旧河道における水田の可能性がでてきたことではなかろうか。今後，この掘立柱建物跡の広がりや，倉庫跡なのか，居住のための住居なのかといった見極めも必要になってくるのではないだろうか。

水田跡については，まだ，決定的なものではないが，他の佐賀平野や四国愛媛県の松山平野等(1)で，旧河道に水田跡が検出されており，今後，原の辻遺跡においても，旧河道における水田の有無について検討しなければならないだろう。（村川）

註記

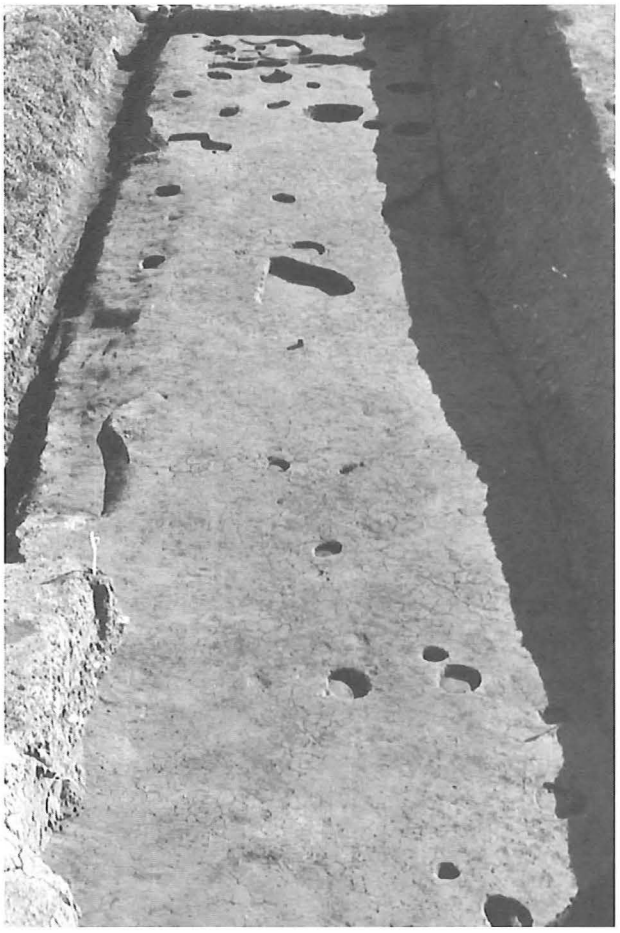
１．田崎博之　1995「道後（松山平野）における弥生から古墳時代の地形と遺跡立地」先史学研究会〝遺跡立地と古環境〟発表要旨　於；福岡大学

図　　版

航空写真

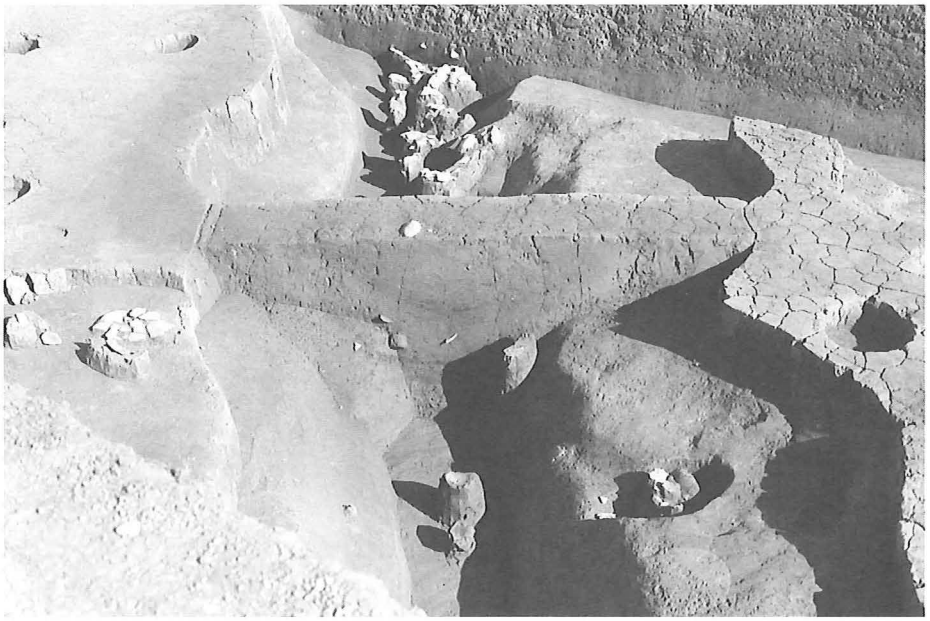
航空写真

作業風景



Ⅰ区（北から）

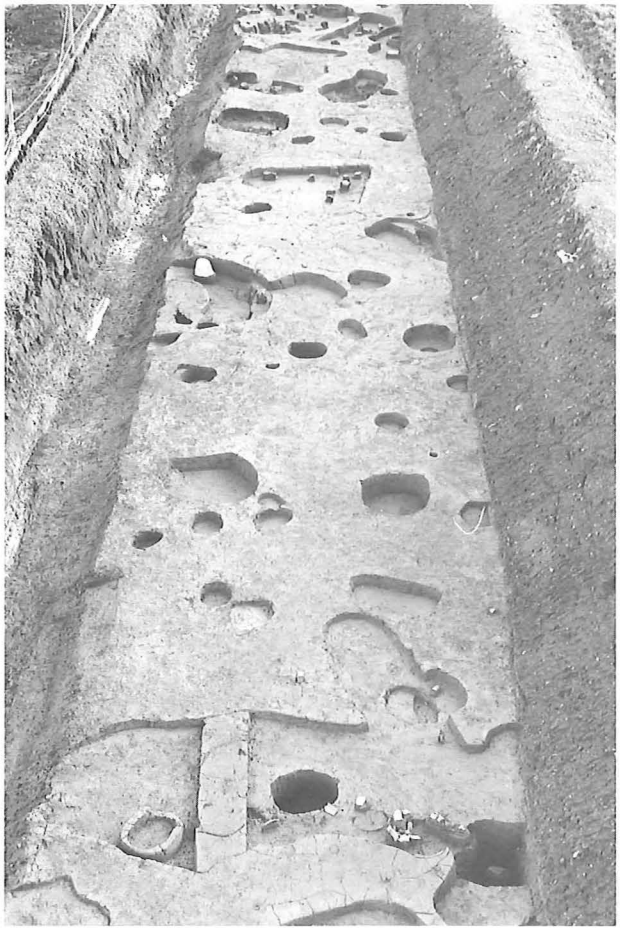
Ⅱ区（北から）



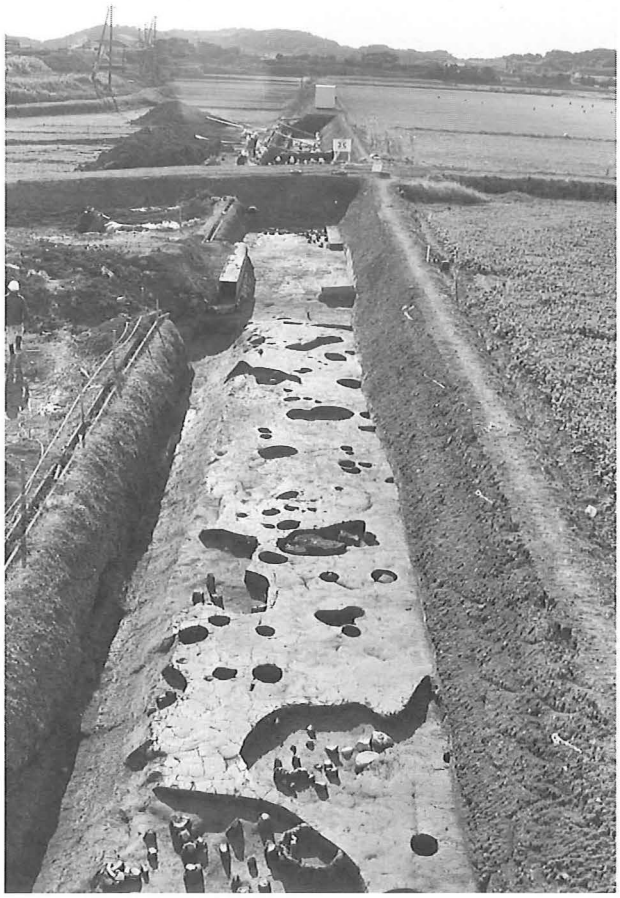
1 号濠検出状況（東から）

III区（北から）

Ⅳ区（北から）

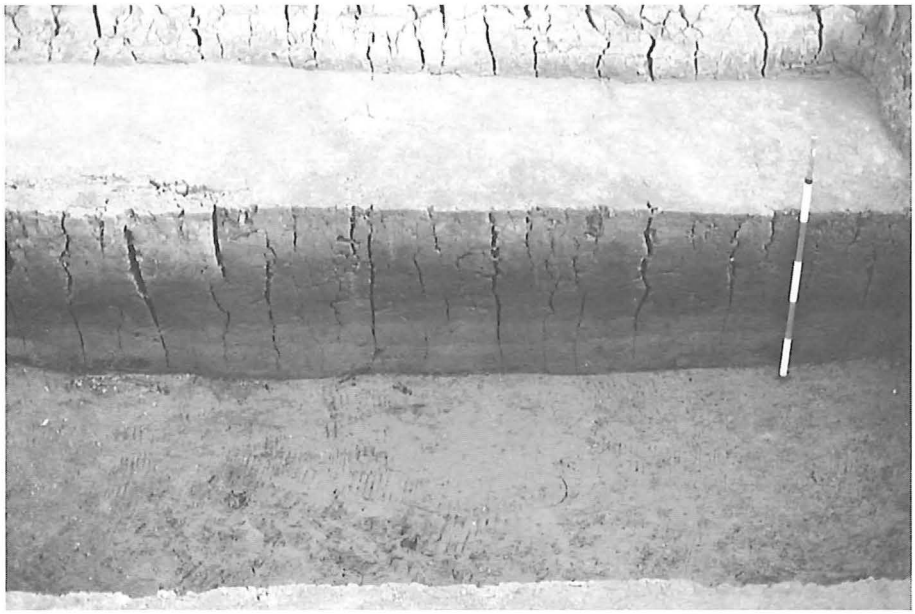


Ⅴ区（北から）



Ⅵ区・Ⅶ区（北から）

Ⅷ区・Ⅸ区（北から）



Ⅷ区西壁土層

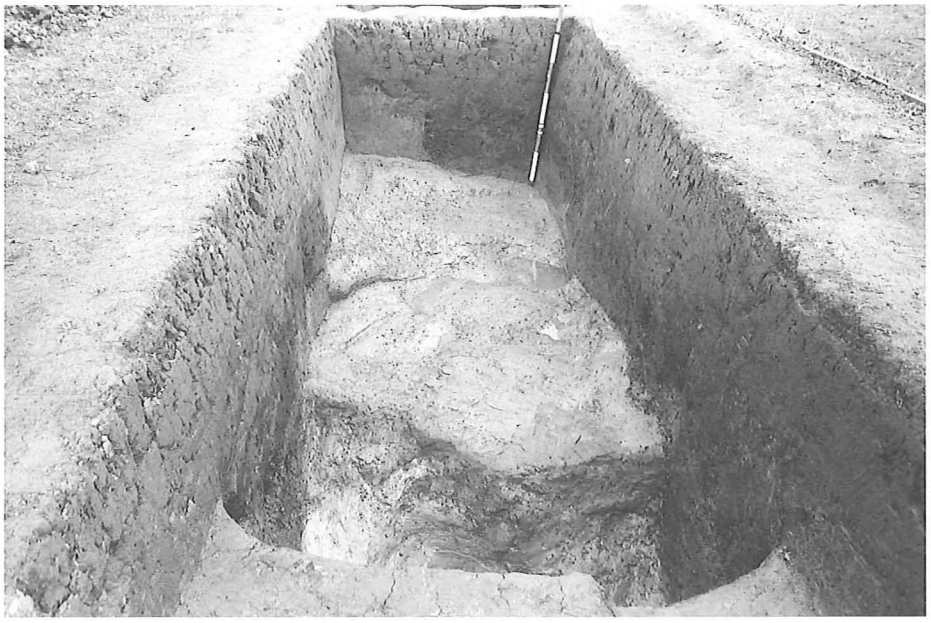
木製建築部材出土状況

木製建築部材出土状況

鉄鎌出土状況

Ⅵ区 6 号土壙

Ⅸ区・Ⅹ区（南から）



Ⅸ区南壁土層

報告書抄録

ふりがな	はるのつじ　いせき
書名	原の辻遺跡
副書名	幡鉾川流域総合整備計画（圃場整備事業）に伴う緊急発掘調査報告書IX
巻次	
シリーズ名	原の辻遺跡調査事務所調査報告書
シリーズ番号	第15集
編著者名	村川逸朗・西　信男
編集機関	原の辻遺跡調査事務所
所在地	〒811-5322　都道府県　長崎県壱岐郡芦辺町深江鶴亀触　TEL09204-5-4080
発行年月日	西暦　1999年　3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
原の辻遺跡（はるのつじいせき）	長崎県壱岐郡芦辺町深江鶴亀触（ながさきけんいきぐんあしべちょうふかえつるかめふれ）	42423	22	33°45′30″	129°55′	19981015 ｜ 19990226	1,120m²	農業関連 圃場整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
原の辻遺跡	遺物包含地	弥生古墳	濠 溝 掘立柱建物 旧河道	弥生時代の土器、 石器 金属器	

原の辻遺跡調査事務所調査報告書第15集

原の辻遺跡

1999．3．31

発行　長崎県教育委員会
長崎市江戸町2番13号

印刷　株式会社　昭和堂印刷